



アイガモのヒナ



アイガモ01

米作りは、完全無農薬がいいのだが、浜松の山里、春野町に暮らす私は、仲間と米づくりをしている。広さは3反(3千平米)。なにしろ主食だから、完全無農薬の安心・安全なお米がいい。

けれども、除草剤を使わない栽培は、除草剤を使う栽培と比べておそらく100倍くらい大変だ。最大の手間は草取り。初年度は、4時半に起きて、毎日1時間余の草取りを1か月間やった。

草取りはアイガモにやってもらう

あまりに大変だったので、2年目はアイガモに草取りをやってもらうことにした。去年の6月、田植えとともに生まれたばかりのヒナを手配した。宅急便で熊本と大阪からやってきた。その数72羽。

しかし、ずいぶんと死んだ。コタツの熱で温めた育雛箱でも10羽くらいが死んだ。2週間ほど育てて、田んぼに放した日、10羽ちかくが死んだ。明け方の寒さのためだ。やがて成長したところで、網から脱走して行方不明になったのがいた。キツネやタヌキに襲われたのがいた。うちの猟犬が襲ったりもした。こうして、さまざまな受難は続いた。

でもおかげで、田んぼの雑草はほとんどなくなった。やがて稲が成長して実ってきた。その時点から、アイガモを田んぼとは隔離しなくちゃいけない。そのまま田んぼに入れておくと、かれらに食べられてしまうからだ。

アイガモの運命は

アイガモ農法の場合、ほとんどのアイガモたちは、最終的には解体処分される運命にある。うちでは、食べたいというので、さしあげたのが20羽ほど。あるいは、大阪の理科の先生が骨格標本にしたいというので、さしあげた。結局、生き残ったのは、農家民宿にあげた7羽のみということになった。

アイガモは草とりの手間が必要なくて助かる。何よりとても可愛い。目の保養にと、はるばる見に来る人たちも多かった。ご近所のお年寄りや子どもたちにも、喜んでもらえた。田んぼが憩いの場になった。

だが、生きものはやはり世話が大変。エサは300キロのくず米が必要だった。朝晩のエサやり、脱走したカモの捕獲も手間だった。死んでいくつらさも大きい。キツネ、タヌキ、トンビなど外敵に殺されるのはつらい。とくに大きくなったら最終的に処分しなくてはならない。それがとてもつらい。

今年は人力での草取り

ということで、今年の田んぼでは、アイガモ農法は行わないつもり。今年は早起きして、人力での草取りということになる。まあ、何事も体験だ。やってみてはじめて、その楽しさ、大変さがわかる。生きものは、可愛いだけではすまされない。そのことが身にしみてわかった。

浜松北部地区担当 生きがい特派員 池谷 啓